慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	テオフィル・ゴーチエのスペイン旅行 : 「ぼくの夢のスペイン」を求めて
Sub Title	Voyage en Espagne de Théophile Gautier: À la recherche de "l'Espagne de mes rêves"
Author	坂田, 幸子(Sakata, Sachiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2004
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.86, (2004. 6) ,p.109(266)- 117(258)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2003年度藝文学会シンポジウム 「Wish you were here! : ヨーロッパ文学と旅」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00860001-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

テオフィル・ゴーチエのスペイン旅行
——「ぼくの夢のスペイン」を求めて

坂田　幸子

フランス・ロマン主義の文学者であるテオフィル・ゴーチエ（1811～72）は、今日では、「恋する死女」などの幻想的短編や、高踏派の先駆となる詩集『七宝とカメオ』などの作者として知られる。しかし彼はそれだけではなく、実に幅広い文筆活動を行った。演劇、美術、文学などに関する膨大な評論を残したし、たとえば「ジゼル」のようなバレエの台本も手がけた。そして彼はまた、すぐれた旅行記作家でもあった。

ゴーチエは1840年の5月から10月にかけてスペイン旅行をする。これは彼にとって、実質的に生まれてはじめての大旅行であり、生涯忘れられない思い出となるだろう。この体験をもとにして、いくつかの作品が生まれた。まず、直接的産物として、紀行文『スペイン旅行』（43年初版。45年増補改訂版）。これは、生き生きとした精彩に富む語り口や、鋭い観察力、精密で美しい描写によって、スペインについて書かれた古今の旅行記の中でも、特にすぐれたもののひとつと言える。さらに、副次的産物としては、それぞれジャンルの異なる3つの作品、すなわちヴォードヴィル『あるスペイン旅行』（43年）、詩集『エスパーニャ』（45年）、中編小説『ミリトーナ』（47年）が生まれた。本稿の前半においては、当時のフランス文学におけるスペイン趣味の流行とゴーチエのスペイン旅行を関係づけ、引き続いて後半では、ゴーチエが旅の体験をどのように作品にしたのかを見ることにより、文学から旅へ、旅から文学への流れを辿ってみたい。

はじめに、ゴーチエの旅のルートを簡単に確認しておこう。彼は1840年5月にパリを出発、駅馬車で一路南下し、スペインをめざす。ボルドーを経て、ピレネー山脈の西の端をまわりこむようにしてスペイン入り。その

後も南下を続け、ブルゴス、バリャドリードなどを経て、マドリードに着く。マドリードにひと月以上滞在した後、6月下旬に南部のアンダルシア地方へと出発。この地方の代表的都市であるグラナダ、コルドバ、セビリヤを訪れる。なかでもグラナダにはもっとも長く滞在し、地元の人の家に招待されたり、闘牛士の衣装をあつらえたりもする。さらに、アルハンブラ宮殿内に寝泊りし、イスラム建築の美を堪能するかと思えばまた、イベリア半島最高峰のムラセン山への登山を試みたりもする。グラナダ出発後は、コルドバ、セビリヤとめぐって大西洋に面した港町カディスへ。そこからは船で、ジブラルタル海峡を抜け、イベリア半島東岸に沿って地中海を北上し、地中海に面したフランスの街ポール・ヴァンドルに到着。陸路パリをめざし、およそ5か月に及ぶ旅の後、10月に自宅へと戻るのだ。

ところで、フランス・ロマン主義者にはスペインに興味や関心を示した文学者が少なからずいるが、なかでも特に、ユゴー、メリメ、ゴーチエの3人は、“スペイン通”の御三家的な存在である。ユゴーの場合は特殊なケースで、父がスペインに駐留していたナポレオン軍の将軍であったため、1811年、母に連れられてマドリードの父のもとへと行く。ちなみに、このとき国境を越えてまもなく通りがかった村の名前を、後にみずからの戯曲の主人公の名として、ユゴーは『エルナニ』を書いた。また、メリメは1830年にはじめてスペイン旅行をする。メリメも10年後のゴーチエ同様、ボルドー経由で、ピレネーの西端からスペイン入りし、南下を続けてマドリードへ、そこから南部のアンダルシア地方へと向かうのだ。首都マドリードとアンダルシア地方の主要都市という組み合わせは、今日、旅行会社が企画するパッケージ・ツアーでも定番のルートである。19世紀前半当時からすでに、スペイン観光の原型は出来上がっていたと思われる。

さて、ゴーチエだが、期待に胸を高鳴らせて出発し、スペインをめざすものの、いざ国境を越えるという時、少々メランコリックな気分でこう考える —— 「〔馬車の〕車輪があと何回かまわれば、ぼくはおそらく夢をひとつ失ってしまうのだろう。ぼくの夢のスペイン —— ロマンセーロとユゴーのバラード、メリメの短編と、ミュッセの物語のスペインは飛び去っ

てしまうのだろう」と。[1]この言葉は、ゴーチエのみならず、当時のフランスにおけるスペインのイメージの形成や受容に関して端的に語っている。ゴーチエの「夢のスペイン」を構成する作品たちについて簡単に解説しておこう。

まずロマンセーロとは、スペインの伝統的な物語詩であるロマンセを集めたもののこと。1822年には、ヴィクトル・ユゴーの兄アベルが、フランス語訳を出版した。[2]2つ目の、ユゴーのバラードとは、詩集『オードとバラード集』(25年)のことだろう。この詩集や、『東方詩集』(29年)の中のいくつかの詩は、スペインを題材としている。たとえば、『東方詩集』所収の「グラナダ」という詩は、「グラナダは／けだるいセレナードを奏で／家々を豊かな色彩でいろどる。／夏の夕暮れ時、グラナダがその平原に女や花を散りばめれば／吹く風も息を止める」[3]とうたう。3つ目の、メリメの短編。[4]これにはたとえば、「トレドの真珠」(トレドの真珠と呼ばれた美しい女性をめぐって、キリスト教徒の騎士とモーロ人(ムーア人)が果し合いをするという物語。29年発表)や、「煉獄の魂」(ドン・フアン伝説に基づいた物語。34年発表)がある。また、1830年にスペイン旅行をした際の見聞をもとに書いた「スペイン便り」では、闘牛やスペインの盗賊について語り、同時代のフランスの文学者たちの、スペインへの関心をかきたてた。ちなみにメリメは、デビュー作もスペインものだ。1825年に出版された『クララ・ガスルの戯曲集』は、スペインの女優クララ・ガスルが書いた戯曲集の翻訳という体裁をとってはいるものの、実はメリメの創作である。4つ目のミュッセの物語とは、『スペインとイタリアの物語』(30年)という題の詩集を指す。この詩集の中の、たとえば「アンダルシアの娘」という詩は、「彼女はぼくのもの〔…〕／彼女の黒い眉はぼくのもの／彼女のしなやかな胴とふっくらした脚／王様のマントよりも長く／脚を覆うほどの髪」[5]と、当時パリでもてはやされたスペイン的な女性美をたたえる。

ここに名前の挙がった作品ばかりではない。19世紀前半のフランスでは、スペインを舞台にした作品や、スペイン人を登場人物にした作品が、実に

多く書かれた。

そもそも、フランスにおけるスペインへの興味・関心は、歴史で言えばナポレオン戦争をきっかけにして、文学で言えばロマン主義の到来をきっかけにして、急激に高まった。19世紀前半、フランスの軍隊は2度にわたってスペインに侵攻する。最初はナポレオン軍。2度目は1823年、政情不安の続くスペインへの内政干渉として大軍が派遣される。こうした、スペインに政治的影響力を行使したいという野望と連動して、この国を自分たちの知の体系に取り込み、知識の上で所有したいという願望も強まり、19世紀前半にスペイン関係の書物の出版ブームが起こるのだ。その内容は、ナポレオン戦争や1823年の軍隊派遣の体験談や回想録、あるいは、スペインの地理、歴史、軍事力、道路網、金融、政治、産業などに関する報告書や研究書のたぐいなど、多岐にわたった。

出版されたのは、もちろん、こうした社会科学的な内容のテキストばかりではない。文学作品も大量に生み出された。スペインはフランスの隣国であるとはいえ、険しいピレネー山脈に隔てられて、“異国”たるにじゅうぶんな心理的距離がある。特に南部の地方は、気候も植生も他のヨーロッパ諸国とは異なるし、過去にイスラム教徒の支配を受けたという歴史的特異性もあるとなれば、ロマン主義者たちの心をくすぐらぬはずがない。スペインは、“地方色”、“ピクチャレスク”、“異国情緒”という、ロマン主義のキーワード満載の国として、文学者たちの憧れの地になったのである。さらにその背後には、当時のフランスとスペインとの力関係——フランスの支配欲の対象としてのスペイン、文明の中心たるフランスに対して、周縁・辺境であるスペイン——も働いていたことを忘れてはならない。こうした要素があいまって、心象地理の面では、フランス・ロマン主義者たちにとって、スペインはオリエントの一部、ヨーロッパ大陸におけるオリエントの“飛び地”となった。そしてそこから、“ロマン主義的スペイン”とでも呼びうる既成イメージが形成されたのだ。このイメージを乱暴にまとめてしまえば、「南国のような気候、イスラムの栄華の名残をとどめる土地で、人々は恋の情熱に身を焦がす。黒い髪、黒い瞳の女性は一途に恋

をし、男は誇り高く、名誉のためなら命も惜しまない」というところだろうか。

ところで、興味深いのは、スペインものの文学作品が量産されたこの時代、多くの作家が実際にその地を知らずして作品を書いたということだ。ユゴーさえ、少年期にマドリードに行った経験があるのみで、先に引用した「グラナダ」という詩を書いた。メリメも、『クララ・ガスルの戯曲集』や短編「トレドの真珠」執筆時はまだスペインを知らない。ミュッセに至っては一度もスペインには行かなかった。つまり、当時のフランスにおいては、この国に関する既成イメージが出来上がっており、その型に入れれば、実際にその土地を知らずとも、いかにもスペインらしい作品が創作できたのだ。そして、このようにして書かれた作品が、さらに既成イメージを強化し、それと同時に、人々の心に憧れを一層かきたてる、という現象が起きていたのだった。容易に想像できることだが、こうした状況で形成された既成イメージを抱いて旅をすれば、理想化されたイメージが破壊される可能性がある。ゴーチエはそれをじゅうぶん承知していたからこそ、国境越えのときにあのような不安を感じたのだった。

そして、不安は的中する。ゴーチエの旅の詳細や、その時々の彼の気持ちについては、旅の直接の所産である紀行文『スペイン旅行』を丁寧に読めば、手に取るように分かるが、これについてはすでに他の場所で書いたことがあるので、ここでは詳述しない。(6)ともかくも、黒い瞳に黒い髪のスペイン美人には一向に出会えず、本場で見たスペイン舞踊には、あまりの酷さに愕然とする。旅の前半は、失望・落胆の連続で、パリで抱いていた理想のスペインは、現実のスペインの前に全戦全敗の観を呈する。そしてゴーチエの幻滅は、パリの猿真似をする俗物的人物のあふれるマドリードで頂点に達するのだ。しかし、その後のアンダルシアへの旅において、憧れの国スペインはよみがえる。イスラム建築の遺構、街なかの椰子やオレンジの木、近代文明にいまだ毒されぬかのような人々の暮らしぶりが旅人ゴーチエを魅了する。こうして彼はようやく、「ぼくの夢のスペイン」を現地で確認した満足とともに、帰途につくのだ。それにしても旅行記の後

半は、そのあまりに完成された美しさゆえにかえって、多少の違和感を覚えさせる。そこに描かれているのは、旅人の眼前にある現実そのものではなく、「夢のスペイン」をもうそれ以上は壊したくないと願う心理のフィルター越しに描写された姿なのではないのだろうか。

さて、最初に述べたように、スペイン旅行の間接的所産として、それぞれジャンルの異なる3つの作品が生まれた。今回は、ほとんど忘れ去られた作品ではあるが、ヴォードヴィル『あるスペイン旅行』(7)を取り上げる。

まずはストーリーを紹介しよう。若きパリっ子デジレ・ルニフラールは、長年の憧れの国であったスペインへ旅に出る。途中、家族の反対のために結婚できないでいる恋人どうしの騒動に巻き込まれたり、内戦のあおりをくったり、山中で盗賊に囚われたり（政情不安も、盗賊も、スペインにまつわる既成イメージだ）と、憧れの国で散々な目にあうものの、最後は万事うまくいき、みずからも恋人を得る。艱難の末に出会った理想の恋人ロジーヌだが、念願のスペイン人女性だとばかり思っていたのが、実はパリで近所に住んでいた昔馴染みのフランス人女性であることが分かる、というところで幕が下りる。

このヴォードヴィル、主人公が自分を紹介するせりふが興味深い――「ぼくはパリでおかしな商売をしていた。〔……〕貸し本屋をやっていたのさ。2年前から、ぼくは自分の店の商売道具をひたすらむさぼり読んできた。ユゴー、ミュッセ、メリメ、バイロン卿よ、(8)ぼくはあなたたちを何度も読み返した。あなたたちはすっかりぼくをとりこにして、ぼくに地方色への愛を吹き込んだ。ああ、地方色！〔……〕ぼくは、黄金に輝く実をつけたオレンジの樹、珊瑚色の果実を実らせたざくろの樹、盗賊、密輸商人、ジプシー、そしてとりわけ、小麦色の胸元をして、美しい秋の夕暮れのような憂いの色をたたえた表情のアンダルシア娘たちのことしか頭になくなってしまった。あとはご想像どおり。ぼくはついに我慢できなくなって、自分の店を信用の置ける人にまかせ、〔ピレネーの〕山を越えた」(9)云々、と言うのだ。もうお分かりのように、ヴォードヴィルの主人公ルニフラー

ルは、作者ゴーチエの姿そのものである。ちなみに、ルニフラールが貸し本屋を信用の置ける人にまかせたのと同じように、ゴーチエは、パリでの「ラ・プレス」紙の劇評の仕事を親友ネルヴァルに託してスペインへと旅立った。

ルニフラールがゴーチエだというだけではない。ルニフラール＝ゴーチエには、書物の世界に偉大なる先輩がいるのではないか？そう、すなわちスペイン文学の最高傑作の主人公ドン・キホーテである。『ドン・キホーテ』の冒頭にはこうある――「くだんの郷士は、ひまで困る時折（つまり一年の大半）に、騎士物語を読みふけった。〔……〕夜は暮れぬうちから明けきるまで、朝は白み渡らぬ頃から暗くなるまでも、見つゞけた。それで、〔……〕物語に出てくるあらゆるもの、幻術をはじめとして、鞘当、合戦、果し合、すごい深手、口舌、恋愛、難儀のいろいろ、荒唐無稽のかずかずによって空想がふくれあがり、頭のはたらきを占めつくしたから、読んでいるおそろしい夢そらごとの一切合切を、ほんとうにあったことと思い込んでしまった。〔……〕じっさいに、分別がすっかりなくなったので、世界のどんな狂人ももったことのない、なんとも不思議な考えをもつに至った。それはほかでもない。みずから遍歴の騎士となって、甲冑に身を固め馬に乗り、冒険をさがすためと、読み覚えた遍歴騎士の所業一切にたずさわるため〔……〕天下を旅し〔……〕」。[10]読書に夢中になり、挙句の果てに書物の世界を現実と混同し、本で読んだ世界を求め、夢を追いかけて冒険の旅に出かけるドン・キホーテのことを、ゴーチエがスペイン旅行の道中で思い出さぬはずがない。事実、街道沿いの旅籠に泊まったとき、あるいは、寒村で「哲学的な面持ちのロバ」を見かけたときなど、ゴーチエは折に触れてこの遍歴の騎士の物語に思いを馳せ、旅程の半ばには、「スペインでは、ドン・キホーテを想起することなしに、一歩も進むことはできない」[11]と断言するに至るのだ。

ゴーチエは『ドン・キホーテ』を下敷きとし、しかも、自らの姿を戯画化するという離れ業まで披露してヴォードヴィルを仕立てた。紀行文の佳品『スペイン旅行』*Voyage en Espagne*とヴォードヴィル『あるスペイン旅

行』*Un voyage en Espagne*は、比較するにはあまりに作品としての質に開きがあろう。だが、恋に落ちた相手が実は昔馴染みのパリ娘であったという、現実が夢に対して勝利をおさめて終わるヴォードヴィルは、旅行記が夢のように美しいアンダルシア地方の描写で幕を閉じた後のカウンターウェイトとして、書かれるべくして書かれた作品であり、旅行記とは表裏を成す存在なのかもしれない。

最後にもう一度、旅行記に戻ろう。先に引用した「〔馬車の〕車輪があと何回かまわれば、ぼくはおそらく夢をひとつ失ってしまうのだろう」という部分の続きで、ゴーチエは、旅立ちに際して友人のハイネが少し皮肉っぽく言った言葉を思い出す――「いざスペインに行ってしまったなら、どうやってそれについて話をするつもりだい？」。(12)しかし、ゴーチエの筆からは、まず旅行記が、さらに続いて、ヴォードヴィル、詩集、小説が生まれた。ジャンルも視点も変えて、趣の異なる作品を次々と書くことで、ゴーチエは、ハイネの問いに見事に答えてみせたのではないだろうか。

注

(1) Théophile Gautier : *Voyage en Espagne*, Paris, Garnier-Flammarion, 1981, p.75.

(2) アベルは、ナポレオンの兄でスペイン国王となったジョゼフの小姓として、スペインに滞在したことがあり、そのときに習得したスペイン語の知識を活かして、こうした翻訳をした。他に著作として、ナポレオン軍のスペイン占領の記録などがある。

(3) Victor Hugo : «Grenade», in *Œuvres poétiques*, I, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1964, p.663.

(4) メリメのスペインものといえば『カルメン』だが、この小説が出版されたのは1845年のことなので、ゴーチエはスペイン旅行時にはまだこの作品を知らなかった。

(5) Alfred de Musset : «L'Andalouse», in *Poésies complètes*, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1976, p.73.

(6) 「テオフィル・ゴーチエ、1840年のスペイン旅行」、宮崎揚弘編

『続・ヨーロッパ世界と旅』所収、法政大学出版会、2001年、360～386頁。

(7) Paul Siraudinとの合作。1843年9月21日に初演され、その年の11月までに34回上演された。

(8) イギリス・ロマン主義を代表する詩人バイロンは、『チャイルド・ハロルドの巡礼』(1812～18)、『ドン・ジュアン』(1819～24) などでスペインを題材として扱った。

(9) Théophile Gautier : *Un voyage en Espagne* in *Œuvres complètes*, section III, Paris, Champion, 2003, pp. 129-130.

(10) セルバンテス『ドン・キホーテ』正編 (一)、永田寛定訳、岩波文庫、1978年、112～115頁。

(11) Théophile Gautier : *Voyage en Espagne*, p.237.

(12) Ibid., p.75.